

イスラエルの回復のために祈りましょう

イスラエルのドイツ系のユダヤ人

人口； 225,000 人

▶あなたが作家、弁護士、音楽家、あるいは大学の教授だとしよう。ずっと夢見てきたパレスチナの地にあなたはやってきた。しかし、運命のいたずらにより、あなたの現在の職業は、なんと鶏を飼育することなのである！

▶これが、1930年代にパレスチナに帰還した、ドイツ系ユダヤ人の実情であった。彼らはドイツから離れるまではそれぞれの専門分野において頂点を極め、ドイツ社会にもうまく融合していたが、ある時、それが崩壊し始めたのである。

▶第一次世界大戦は、ドイツにとって廃虚と屈辱という最悪の結果をもたらした。深刻な経済不況に陥ったドイツ国民は、自分の偉大な文化に対する光栄と誇りから、恥と貧困の深みの中へと墮落していた。誰かが責任を取る必要がある、と、その責任の矛先(ほこさき)をユダヤ人に向けて、彼らに罪を着せるのは簡単なことであった。

▶待ち受ける危険を察知し、30万人の先見の明のあるユダヤ人は、勇気をもってドイツから脱出した。だが、当時の委任統治国イギリスは、イスラエルへの移住者人数を制限していたため、帰還を果たしたのはわずか6万人にすぎなかった。

▶イスラエルでの生活は、ドイツからのユダヤ人にとって厳しいものがあつたが、ナチスに滅ぼされるよりはよかつた。当時は、政府や公共機関も皆無で、ドイツ社会のようになめらかに機能する秩序などあるはずもなかつた。彼らは袖をまくりあげて肉体労働に取りかかり、自ら農業のための土地を開拓し、耕し、鶏を育て、あらゆる種類の、いわゆる「雇われ農民」の仕事をしたのである。

▶しかし、これよりもはるかに厳しかったのは、現地パレスチナにいた、ほかのユダヤ人の反応だつた。ドイツ系のユダヤ人は「敵の言語」であるドイツ語を使っていたので、ほかのユダヤ人に敬遠され、疑われ、場合によってはあからさまに拒絶された。彼らの共同体は孤立してしまい、それゆえ、新しい言葉であるヘブライ語を習う機会も少なくなつてしまった。

▶皮肉なことに、ドイツ系のユダヤ人は、いわゆる“祖国ドイツ”に対して熱心な忠誠を持ち続けたため、周りの人からさらに拒絶された。彼らはドイツの文化、言語、音楽を大変誇りに思っていた(現在でさえイスラエルでは、反ユダヤ主義をあらわにし

ていたドイツの音楽家、リヒャルト・ワグナーの音楽を公の場で流すべきかどうか、意見が二つに分かれている。ましてや、当時のイスラエルでの感情は、今よりもはるかに高まっていたはずである！)。

▶ドイツ系のユダヤ人は、よく「イエツケ」と呼ばれる。これはドイツで使うと「ユダヤ人」という意味になり、イスラエルで用いれば「ドイツ人」の意味となる。両方とも蔑称(べっしょう)である！ ドイツ人は秩序と完全さを好む。しかし、当時のパレスチナは、それとは全く対照的な状況であった。炎天下でも背広を着る彼らは、気候に合ったカジュアルな服装をしている移住者に比べると、異色な存在だった。

▶彼らの気質、技能と教育背景から、ドイツ系のユダヤ人はパレスチナの生活に大きく貢献してきた。彼らは経済体制を現代的なものに変え、社会のあらゆる側面で良い影響を及ぼしてきた。彼らはイスラエルに3千万から4千万ドルの資金を持ち込み、産業と農業の発展のために投資したのである。

▶現在でも、イスラエルのドイツ系ユダヤ人は、自分のアイデンティティーをかなり意識している。彼らは今でも“教科書どおり”の仕事のやり方を守り、周りから「イエツケ」と呼ばれている。そして、いまだに“祖国ドイツ”を愛しているために、周囲の人々に酷評されているのである！

祈りの課題

☆ イスラエルで暮らすドイツ系のユダヤ人が、主イエスを自分のメシアとして知ることができるように。そして神にある、人生の目的と使命の中を歩めるように。

☆ ナチス・ドイツと結び付けられてしまう、彼らの恥が取り除かれるように。そして、神が、“祖国ドイツ”の子供としてよりも、“天の父”の子供としての、新しいアイデンティティーを彼らに与えてくださるように。

☆ 彼らの一部が持っている怒りの根源である、過去の傷や恨みが癒やされるように。

☆ ドイツ系ユダヤ人が、もっと周りの人との協調性を持ち、柔軟な態度を取ることができるようになる。また、他人を支配したり、指図したりしようとする思いから解放されるように。

☆ 主イエスが彼らに人を赦(ゆる)す能力を与えてくださり、彼らの嘆きが喜びに変わるように。彼らの心がホロコーストの悲惨な残虐行為の記憶から癒やされるように。また、多くの犠牲者が出たのに自分だけが生き残った、という間違った罪悪感から解放されるように。

☆ 彼らがイスラエル社会に受け入れられ、社会との一体感を得ることができるようになる。

☆ イスラエルのドイツ系ユダヤ人の間で働く、働き人たちのために。

